

松本清張記念館

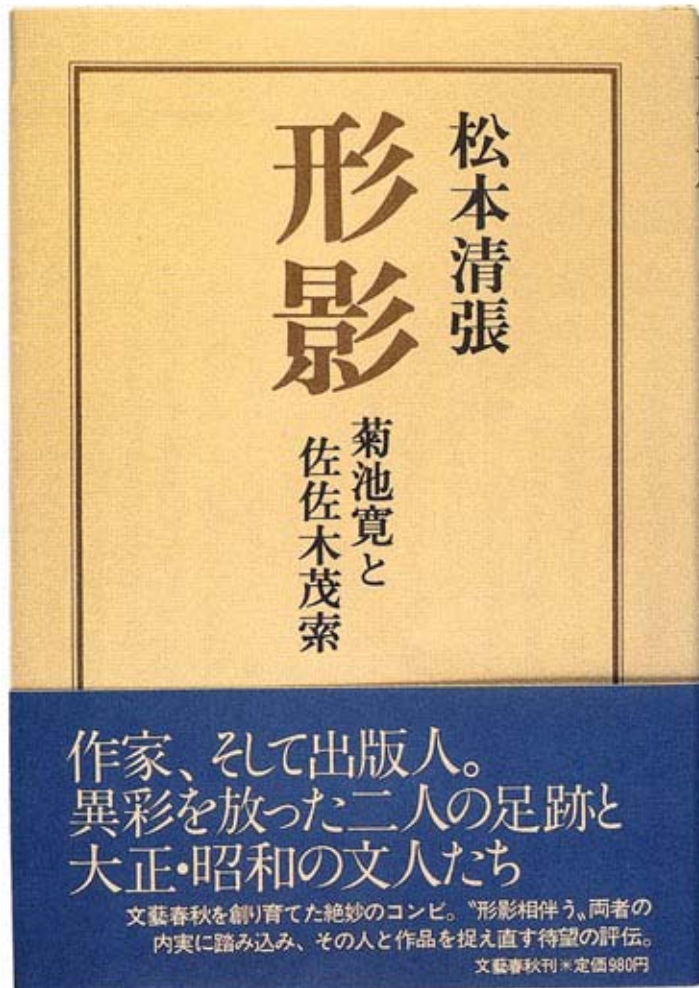
◆館報◆
2003.8
第13号

「形影相伴う」の理想形になった

理想形になった

現在入手できる本

「形影」菊池寛と佐佐木茂索（文藝春秋）
松本清張全集 第64巻（文藝春秋）



昭和57年10月 初版
文藝春秋刊

目次

- インタビュー 清張を語る
清張さんとわたし 安田満…………… 2
- 特別企画展「松本清張と菊池寛」展
清張原風景 点描「火ノ山」…………… 4
- みんなの広場…………… 5
- 友の会活動報告…………… 5
- 秋吉茂氏を悼む…………… 6
- 展示品紹介…………… 7
- 探検！清張記念館…………… 7
- トピックス…………… 8

作品紹介

「形影」とは、菊池寛と佐佐木茂索の名コンビを指している。名コンビと言っても、それは全く才能の違う二人がいることで、結果的に成功したという意味だった。

作家としての素質も互いに相容れない同士であったのに、社内で派閥ができた時、対立、抗争がなかったことを、清張は「両人とも文士の文士たる所以である」と評している。

もともと清張は菊池寛に敬愛の念を持っていた。少年時代から憧れの作家であり、生い立ちや、経験からくる人生観、作家としての姿勢には共通するものがあった。冒頭で語られているように、はじめは「菊池寛小論を書く」ことが、この作品の主眼であった。しかし、対照的な茂索という文藝春秋のパートナーを描くことにより、寛を照らし出す鏡となった。作家としての評価は、数多くの名作を残した文壇の大御所・寛に軍配が上がるが、文藝春秋を継ぎ、社員を守った茂索の功績も大きい。いち早く奥様ボーンスを支給したのも茂索ならではの粋な計らいであった。寛は、自分宛に礼状が来て初めて知ったという。「菊池の死後、その徳をたたへてこの事を書いた旧社員も二三ならずあつた。誰もわたしが独断でした事は知っていない。（中略）かういふ連中が私を冷たい男と書き、且つ今もそう思っているのである」と、あるとき茂索はメモに記している。寛が表なら茂索は裏、陽に対し陰の役割を担った。

清張は、決して二人が仲良かったとは書いていない。しかし、文士の集まりであった文藝春秋が大会社となっていくうえで、なくてはならない両輪であったことは、間違いないだろう。

（学芸担当 柳原 暁子）

清張さんとわたし

作家・安田満さんは、清張の朝日新聞西部本社時代の同僚です。小説を書きはじめて頃の清張をよく知る安田さんに、当時の思い出などをうかがいました。

2003年6月17日(火) 戸畑区中原 安田さん宅にて 聞き手:中野吉明・小野芳美

「安田さんは、昭和十七年朝日新聞西部本社に入社されて、翌年すぐにジャワ新聞に、とお聞きしていますが、清張との出会いはいつ頃なのですか？」

昭和十五年頃、私が参加していた鹿兒島の俳句結社「キリシマ」が、俳句弾圧に遭いました。それと関係があるのでしようか、入社後ほどなく陸軍報道員としてジャワに派遣されました。入社してすぐ、上司で「層雲」同人の浜口矢十(本名・彌十郎)さんに誘われて、社内の「朝日厚生俳句会」に参加しました。編集局があった二階の和室で行われていたが、この時は顔を合わせたという程度でした。句会は戦後復活しましたが、清張さんはみえませんでした。

社ではその後昭和二十五年頃に有志が集まり、今の北九州市立大学の英語の先生を招いて勉強会をしていましたが、そこにも清張さんは出席していません。とにかく知識欲の旺盛な人でしたね。

「安田さんに『或る『小倉日記』伝』を読みな聞かせて、感想を求められたところで……」

私は「九州文学」創刊時からの同人で、時々小説を書いていました。火野葦平さんにも参加していた当時の「九州文学」は、東京で発行されている雑誌と同じくらい有名で、地方のいち同人誌以

上のものでした。私は小説を書いていることを特に社内で言ったことはなかったのですが、清張さんは誌上で私の名前を目にしていたのでしょうか。ある朝出勤すると、玄関で私を待っていました。私はそのころ出勤時間がまちまちだったので、清張さんは時間を調べて待っていてくれていて、「或る『小倉日記』伝」の草稿を読んで感想を聞かせてほしいということでした。私も知っている実際の人物が何人もモデルになっているので、興味深かったです。

「『半生の記』にも、『或る『小倉日記』伝』を同僚に聞いて買った、とありますね」

社前の電車通りを挟んだ空き地で古電柱に腰掛けて、清張さんが情感をこめ、抑揚をつけて読むのを聞いていました。だから聞き役になるのを迷惑がった覚えはないのですが、「半生の記」には同僚は「遂に迷惑がった」と書かれています。昭和二十六年の夏から秋頃でした。原稿が一段落した後、清張さんは私を自宅に招いて奥様の手料理でもてなしてくれました。

翌年、「或る『小倉日記』伝」が「三田文学」に載った頃、私は東京本社に転勤していました。「三田文学」の水曜会に直方出身の作家野田開作さんと参加しました。和田芳恵さんはこの夜のことを「松本清張全集」第三十六巻の月報に書かれていて、私の名前もでてきます。

朝日厚生俳句会誌(安田満さん所蔵) 昭和十八年開催の句会のもの 清張の句「拙打や山かげの陽の静かなる」が掲載されている



私は聞き役の時からよい作品だと思っていた「或る『小倉日記』伝」の感想を、和田さんや木々高太郎さんに求めたのを覚えていています。

「『或る『小倉日記』伝』の主人公のモデル田上耕作さんともお知り合いだったとか？」

戦前、「九州詩集」で顔を合わせていました。昭和十二年の「九州詩集」第三集の出版記念会では一緒に写った写真があります。体はあまり不自由という印象はありませんでした。いつも和服姿の方でした。同人には、阿南哲朗さんといって、よく土鈴の話をしましたね。清張さんは田上さんとは面識がなく、のちに阿南さんから聞いて話を書いたのではないのでしょうか。現実の田上さんを清張さんが知らなかったことが想像力をふくら



安田 満(やすだ みつる)

作家。
大正4年生まれ。
元朝日新聞記者。
在職中から執筆活動も行う。
著書に「玄耳と猫と漱石と」「多佳子幻影」、
詩集「渥春」などがある。



ませることにつながり、よかったのだと思
つています。全体を四、五回は聞きまし
た。私が駄目を出しても、彼は素直に書
き直していましたね。

作品関係で他に印象に残っているのは？

よくいろいろな相談を受けましたね。
江藤新平関係の資料について聞かれた
ことを覚えています。佐賀県立図書館
に「新平伝」があるというので、次の休み
にすぐ行って見てきたようでした。この
時の取材は「梟示抄」に実ったのでしょ
う。私が当時いろいろ持っていた隠れキリ
シタン関係の本も、書棚から出して熱心
に読んでいました。これは作品にはなっ
ていないようですね。清張さんは借りた
本は必ず返す人でした。

仲がよかつたんですね

風邪で一週間くらい社を休んだ時、同
僚が見舞いに来ない中、清張さんだけは
当時高価だったサントリのタヌキ瓶を
提げて来てくれました。私が酒を飲ま
ないことを知っているのに、「体をぬくめ
たら回復が早いよ」と。感激しましたよ。

上京の相談もつけられたとか？

東京に行くということは、腹の中では
早くから決めていたのでしょうか、どう
だろうか聞かれました。ほかの方にも

相談されていたようですね。私は「東京
に行ったら苦労があるぞ。でも、行ってみ
ろ、いちかばちかだ」と勧めました。

作家になりたいというきもちはあつた
のでしょうか、そうは言いませんでした。
でもその後、本を出すことに、「三冊ず
つ必ず送ってくださいました。ところが「西
郷札」が届いたとき、署名が「吉田満様」
となっていました。出版社の担当の人が
発送の際、私と朝日新聞の吉田さんの
宛名を間違えたのだと気づいたのはか
なり後のことです。当時は吉田さんとい
う人がいたことを知らず、私の名前を問
違えたのかと思ひ、この時だけは礼状を
出しませんでした。それからだんだん疎
遠になってしまいました。

清張は小倉時代、考古学にも関心があ
つたと「半生の記」に書いています

上京の際、私の家で送別会をしたので
すが、清張さんは「豊後磨崖石佛の研究」
という本をくれました。大正十四年に
京都帝国大学が刊行した考古学研究
報告書です。今では復刻版が出ていま
すが、この元本は古書店でもなかなか
入手できない本です。小倉にいた時から
考古学を勉強し大切にしていた本を、
清張さんは逆餞別に私に贈ってくれま
した。今でも手許に残しています。

安田さんは小説「多佳子幻影」に、俳人・
橋本多佳子さんの想い出を描かれて

いますね

橋本多佳子さんはとてもきれいな
人でした。電車の窓から、彼女の一家が住ん
でいた櫛山荘をいつも眺めていました。
中原の海岸そばの丘の上にあり、イギリ
スから建設資材を取り寄せたという、
しっかりした建物でした。今でも残って
いたら北九州のすばらしい文化財になっ
ていたでしょう。

最後に面白い想い出話をなにか

昭和二十六年頃でしたか、私の家で
清張さんと友人で福岡の作家の中村光
至君と三人で食事をしたとき、女房が
ピーマンの肉詰めを出したんですね。私
が席を外した際に、ピーマンを指して中
村君に「これは何か」と尋ねたと。

ピーマンはまだ珍しかったんでしょ
うね(笑)

私が言うと、嫌みにとられるかなと
思っていたんですが、生前中村君が書い
ちやつたから、今日はお話ししますね。
やっぱり嫌みかなあ…。(笑)

〔九州詩集〕一戦前には四回発行された。九州出身者、
在住者を中心に執筆された。第三集には五十六人
が参加した。

〔阿南哲朗〕一明治三十六年、昭和五十四年、童話作
家、詩人。小倉到津遊園園長を務めるかたわら、北
九州地方の児童文学運動に力を入れた。童話集「よ
るの動物園」には、清張が序文を書いた。

「松本清張と菊池寛」展

～どこか似ている文士の面影～

■平成15年8月4日(月)～
10月31日(金)

■松本清張記念館
企画展示室

今回の企画展では、どこか似ている二人の作家という視点から、清張が敬愛してやまなかった作家、菊池寛との関わりについてご紹介します。

【菊池寛が遺したもの】

菊池寛は、その作品だけでなく、「文藝春秋」の創刊や「芥川賞・直木賞」の創設、作家の自立をめざした日本文藝家協会の設立などにより、文壇の大御所と呼ばれました。現在の文学界の基礎を作りあげた菊池寛が遺したものを紹介します。

【寛から清張へ】

少年時代、菊池寛と芥川龍之介を愛読した清張、しかし清張は芥川よりもあえて寛を「わたしの古典」に挙げています。そして自ら影響を受けたと明言する唯一といっている作家が寛なのです。

癖やしぐさまで似ていたといわれる二人の文士の面影を紹介します。

【展示のみどころ】

今回の企画展では、寛の中学時代の習作や、英語で書かれた手紙や論文、愛用の将棋駒などの初公開資料がご覧いただけます。また、これまで聞くことのできなかった寛の肉声も聞くことができます。ご期待ください。



「文藝春秋」創刊号



「形影 菊池寛と佐佐木茂榮」の原稿と創作ノート



菊池寛の馬主服
(複製)



門司・和布刈側からみた火の山と甲山

「火ノ山の崖崩れは、夜中に突然やってきた。表戸の雨戸を破って餅の店を土砂で埋め、奥に寝ている四人の枕元へ木を付けた土と岩が押しよせた。母は私を背中に縛りつけ、その母の手を父が引張り、祖母がうしろから押して、闇中に屋根伝いに逃げた。せまい屋根のすぐ下は海だった。」

——山崩れは、道路拡張工事のダイナマイト爆破作業が原因だったという。」「(骨壺の風景)」

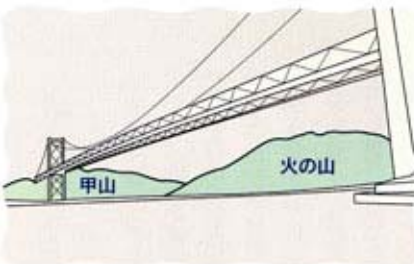
標高二百六十八メートルの火の山は交通の要衝・関門海峡の東側入り口に位置し、その名は古代、都との連絡のためにのろし場が置かれたことに由来する。

清張原風景 点描

火ノ山

戦国時代、大内氏により城が築かれ、九州の大名との合戦の攻防拠点となった。明治二十三年(一八九〇)、下関に要塞砲大隊が設置されると山頂に砲台が築かれ、市民の立ち入りはいっさい禁止された。戦後、昭和三十一年には瀬戸内海国立公園の一部に指定され、今日、関門海峡を間近に望む観光地としてにぎわっている。

「御裳川橋は朱塗りの欄干になっているが、その袂のあたりの小公園が、ほぼ七十年前には、八軒ばかりの家が長府街道に二列にならび旧壇ノ浦の東端だった。そこから西へ三十メートル寄って道路がわずかにカーブする。そのあたりが西端であった。旧壇ノ浦はまことに短い集落だった。小公園の斜め前には落石防止の設備があるが、そこが旧壇ノ浦を全滅させた山崩れの箇所であった。」(「骨壺の風景」)



この文章や古い地図なども参考に種々検討すると、清張の住んだ旧壇ノ浦を全滅させた山崩れは、実は火の山の西側に位置し、今日関門橋の下関側結節点となっている甲山で起こったと思われる。

今回は、最近お寄せいただいたアンケートの中から、皆さんの清張作品を読んでのご感想や作品に対する思いを掲載しました。清張作品は、読み終わった後にさまざまな思い・感想がこみ上げてくる作品が多いですね。掲載された感想に共感される方もいらっしゃるれば、また違ったご意見・ご感想を持たれた方もおられるかと思えます。さて、あなたはどちらでしょう？

- ・「或る『小倉日記』伝」— 高校生のときに読んだが、ただの推理作家だというイメージを砕かれた衝撃は大きかった。
(30代・山口・男)
- ・「砂の器」— 親子の愛情、どうしようもない自我欲。何度読んでも涙を流す、大好きな一冊です。
(50代・住所不明・女)
- ・「砂の器」— 多くの作品の中で一番好きな作品。人間の持つ、悲哀、弱さ、そして温かさ、強さがそれぞれの人間像に示されている。もう少し長生きして、今日の日本の問題、アメリカのテロ事件、最近の北朝鮮との問題も書いてほしかった。
(70代・東京・女)
- ・「陸行水行」— 邪馬台国はどこか？素人にも興味ある事柄を推理し、旅する内容が好きだ。
(60代・神奈川・男)
- ・「遠くからの声」— 社会派といわれる清張の文学的な面がおしだされていて、おもしろい。
(20代・広島・女)
- ・「ガラスの城」— 人間の心理、感情が非常によく書かれていて好きです。
(30代・神奈川・男)

- ・「点と線」— 中学生のとき初めて読んだのですが、くいくいと中に引き込まれて一日で読み終わってしまいました。
(10代・北九州市・男)
- ・「点と線」— どこを読んでも、どの登場人物も清張さんのキャラクターを表している。
(30代・東京・男)
- ・「割裂」— 読んだ後、色々考えさせられるので好きです。
(20代・神奈川・女)
- ・「鬼畜」— 人間の本质が見えてくる。
(50代・福岡・男)

このコーナーでは、アンケートなどでお寄せいただいた意見等をご紹介します。清張や作品に対する思い、エピソードなど何でも結構です。皆さんの「声」を是非、記念館までお寄せください。
※アンケートは館内にも置いてあります。

友の会 活動報告

●第3回 清張サロン(平成15年4月18日(金):参加者14名)

今回取り上げた作品は「ゼロの焦点」。皆さんお馴染みの作品ということもあり、参加者からは、作品の舞台となった能登を訪問した時のエピソードが紹介されるなど、数多くの意見・感想が出されました。昨年9月にスタートした清張サロンも今回が3回目。参加者もサロンの雰囲気に慣れてきたようで、終始活発な意見交換がなされました。

平成15年度も、引き続き清張サロンを実施していく予定です。



●残念☹ 日田文学散歩が延期に…

5月31日(土)に予定されていた文学散歩は、目的地である日田方面の悪天候(台風)により開催を断念しました。

参加者、事務局ともに楽しみにしていただけに、大変残念な結果になってしまいました。

今回の日田方面文学散歩については、次年度(15年度)に延期して、開催する予定です。

日程等詳細が決まり次第、会員の方には改めてご案内をいたします。

●友の会 会員募集!!

ただいま友の会では新規会員を募集中です。松本清張記念館友の会では清張ゆかりの地の見学や読書会・講演会等の開催、会報の発行など多彩な事業を展開しています。

会費は、8月から翌年7月までの1年間で会費は3000円となっております。

■友の会事業

- ・講演会、シンポジウム等の開催
- ・読書会、文芸講座等の開催
- ・映画ビデオ等の上映会の開催
- ・会報の発行
- ・松本清張ゆかりの地、他都市の文学館見学事業の実施 など



■会員の特典

- ・常設展の招待券(年間4枚)進呈
- ・企画展(年2回)のご招待
- ・記念館主催事業のご案内
- ・記念館広報誌(館報)・企画展図録進呈
- ・友の会主催事業のご案内、会報の進呈
- ・友の会オリジナルグッズ(ペーパーウエイト)の進呈(加入年度のみ)
- ・喫茶「石の館」(記念館内)の飲食料金1割引

会員募集中!

友の会入会のお申し込みは…

TEL. 093(582)2761 松本清張記念館友の会事務局まで

秋吉茂氏

を悼む

朝日新聞社に勤め、松本清張と深い親交のあった秋吉茂氏が平成十五年四月亡くなられました。

朝日新聞西部本社時代に、田上耕作の法要の記事を書いた秋吉氏に清張が「小説にしたい」と相談におもむいたのが、「或る『小倉日記』伝」誕生のきっかけとなったといわれています。

また秋吉氏は東京本社勤務時代に、清張から「黒い画集」直筆原稿を贈られています。

この「黒い画集」直筆原稿は、秋吉氏の「記念館に納まるのがベスト」という格別の厚意により、平成十三年十二月手ずから梱包のうえ、ご寄託いただいています。

秋吉茂氏のご冥福をお祈りするとともに在りし日の姿を偲んで、昨年四月、清張記念館友の会員らを行われた講演を紹介いたします。



記念館前での秋吉氏ご夫妻（平成14年4月）



友の会会員らの前で講演する在りし日の秋吉氏

プロフィール

- 大正六年福岡県生まれ。
- 朝日新聞西部本社社務部記者を経て、昭和三十五年東京本社に移る。
- 著書に「美女とネズミと神々の島」昭和四十年第十三回日本エッセイスト・クラブ賞受賞「駅弁の町」通かなり流砂の大陸」などがある。
- 松本清張のほか、海音寺潮五郎、子母澤寛などの作家とも親交があった。

独行道を貫いた達人・松本清張

剣豪・宮本武蔵は、その晩年を過ごした熊本で、「独行道」を著しました。「独行道」は、兵法の道を極めるための自戒の著です。今日は「独行道」を貫いた達人、松本清張」と題して、お話しをさせていただきます。

清張さんが朝日新聞社に入社したころ、職員は社員、準社員、雇員などに区分され、その序列化は明確でした。学歴のない清張さんはこの実社会の中で、自分は「歯車のねじにも値しない」（「半生の記」といっています。将棋をよく指してましたが、自分の肩書を忘れて実力を存分に発揮できたのは、将棋盤のうえくらいだったかも知れません。

芥川賞を受賞してからも、社内における清張さんの評価は変わりませんでした。芥川賞を受賞した昭和二十八年の十二月、希望して東京本社に転動します。丁度その時、私は「李承晩ライン」の取材で長期出張をしていました。取材から帰って来ると「いろいろと世話になった」という内容の置き手紙が机の上にあります。

昭和二十九年、私は国会取材の名目で二月間東京に出張しました。清張さんは、そのときはまだ妻子を小倉に残し、ひとり親戚の家に居候していた時期だったと記憶しています。その間、毎週末になると、清張さんとよく新宿あたりの安い飲み屋に出かけたものです。

「今の職場にはなかなか馴染めず、息が詰まりそうです。変わるんじゃないか」とこぼしたこともありましたが、そして最後には「今のままでは自分の将来もしていません。思い切って退社し作家生活に入ろうと思うがどうか」という相談を受けました。

今日、芥川賞、直木賞を受賞すれば作家として脚光を浴びますが、当時はまだそういう状況ではありませんでした。週刊誌も「週刊朝日」と「サンデー毎日」があるくらいで、原稿料で生活できるのは、ほんの二部の作家にすぎませんでした。「ペン」は二本、箸は二本といって、印税で家族を養うのは大変だと「フレキ」をかけてしまいました。新聞社を退社し作家になったのは、それから二年後でした。そのとき受け取った退社の挨拶には、「小生に

とつて、いよいよ背水の陣です。これからもよろしく頼みます」と書き添えてありました。

私は昭和三十五年東京本社に転動し、それからまた清張さんとの交流が復活、再開します。丁度週刊誌「フレキ」となっていた頃で、作家は引張りだ、清張さんも一躍流行作家となっていました。今度は銀座の高級バーに案内してくれました。数年前、新宿の安酒場で進退に窮していたころとは全く違っていました。高級バーではよく「自分の弟だ」と私を紹介していました。どこか泥臭く、九州なまりがとれなかったから、本当にそう思っていた人も多くいました。

私は、清張さんから二枚の色紙を送られました。一枚は私の似顔絵ですが、もう一枚には「我が道は行方もしれず 霧のなか」と書いてありました。そこには大作家となっても苦悶する清張さんがいました。

働き過ぎが気になり、少し休むことも勧めましたが、「自分は大作家とは思っていない。今やはややされていてもいつ蹴飛ばされるかわからない。自分は不器用でほか出来ないから、精一杯書いています。毎日が真剣勝負なんだ。休むわけにはいかない」といいました。

その時、清張さんはペンをもった武蔵だと思いました。すべてをかなぐりすててひとつの道に進む作家・清張さんは、まさしくわき目もふらず剣の道に進んだ武蔵という気がしてならないのです。

昭和四十三年、お互いの多忙と些細なことから疎遠となつてしまい、そのまま清張さんが亡くなるまで会うことはありませんでした。

青山葬儀所での「おわかれ会」で奥さんに「会いたがっていましたが」と声をかけられたことが、いまだ無念でありません。



古代史カード

第二展示室「古代史コーナー」に、清張が備忘のため、研究書の二部分を書き抜き、要約を付し、書名と該当ページをつけ「感想も付した」(別冊文藝春秋一七〇号 昭和六十年二月)直筆の読書カードが展示されています。四つに分けた東の一番上は、「奈良時代の文化圏」「竹原古墳の習」(筒形銅器と平形銅剣)「アケメネスヘルシア金貼銀製盆・銅鼓の文様」のカードで、巧に写し取った絵図が目を惹きます。日本史と東洋史に分けて索引も作っていました。それは「読書メモ索引」として「作家の手帖」(昭和五十六年 文藝春秋刊)に収録されています。



欠番もありますが索引には、日本史八十六件、東洋史百三十件が整理されています。項目を見てもすぐに気づくのが、「魏志倭人伝」を含め「邪馬台国」関係のカードが意外なほど少ないことです。「邪馬台国」は、清張が古代史研究で最初に取り組み(「古代史疑」昭和四十四・四十二 中央公論)、終生関心を持ち続けたテーマなのに何故なのでしょう。比べて、日本史関係では仏教、特に密教や護摩の起源、バラモン教などに関する抜き書きが目につき、東洋史関係では西域と仏教美術、ゾロアスター教を中心とした古代ペルシアなどが大半を占めます。

読まれた方は、古代飛鳥へのイラン・ソロアスター教徒の渡来を推理した「火の路」(昭和四十八・四十九朝日新聞)や、唐都長安と天平の奈良を舞台にした「眩人」(昭和五十二・五十五 中央公論)を思い出されるでしょう。索引は昭和五十六年当時のもので、「遅まきながら(じつさい、もつと早くやればよかった)こういうカードをつくった」(「作家の手帖」)ともあるので、「火の路」執筆以降のカードである可能性が高いとは言えます。「邪馬台国」関係があまりないのも、そのためかもしれません。精力的にその謎に挑んだのは、ずつと早く「古代史疑」(前記)や「古代探究」(昭和四十六・四十七 文藝春秋)の頃からです。とすると、作り始めたのはやはり「火の路」の頃なのでしょう。

当時の編集者ということ、当館の藤井康栄館長への取材を思いつきました。灯台下暗し。何とこのカード作りを直伝した当人が藤井館長だったのです。「このごろ記憶力が衰えてきた」との話がきっかけだそう。清張が六十代後半のことで、おそらく「眩人」の連載中の頃だと思われ。カードは「ゴクヨの補助簿13穴」。自分も使っており、全国どこでも買えるとの理由から、館長はこれを勧めたそうです。横書き用を、清張は自分流に縦書きで使っています。たまたま、「ほら、こんなに」と嬉しそうに、カードの箱(「キーの空き箱」)を見せたそうです。

もう一度、四枚のカードを見に来て下さい。最初の一枚にそのときの笑顔が見えるかもしれません。あとの二枚には、独学孤高の人、松本清張の創作と思索を支えた、不断の向上心と、衰えぬ好奇心と、強靱な精神力を内に秘めた厳しく挑むかのような顔が見えることでしょう。

(学芸担当 中川 里志)

きよしとハルコの探検! 清張記念館

1F “記念館オリジナル映像「点と線」”の巻



ハルコ いやー、1時間があっという間だったわね。小説やドラマとはまた違った独特の雰囲気よかった。

きよし 風間完さんの絵が話のテンポによくマッチして、イメージの押し付けにならないところがいい。こういう作品は、声優の演技も見どころだね。



東京駅15番ホームに立つ佐山とお時

ハルコ 昭和30年代の日本を描ききった、ベテランの仕事が光るわね。でもストーリーそのものは古さを感じない。やっぱりこの作品が、時代をこえた人間の「業」によって巧みに構築されているからなのでしょうね。さすが清張!

ハルコ そういえば偶然見たんだけど、きのう駅で一緒にいた女の人って、誰?

きよし さあね。僕って意外とモテるから……。あれ、もしかして、妬いてる? うふふ。

ハルコ でも、そのあと一人でコンビニ弁当食べてたから、たいした間柄ではなさそうよね。

きよし 鳥飼刑事、参りました。見栄はってました。道を訊かれてただけです。

清張作品の挿画を多数手掛けた、風間完氏の原画をもとに、デジタル技術を駆使してアニメ化した、これまでにないユニークな映像は、推理小説本来の面白さが味わえます。「点と線」は1階・推理劇場で上映中です。(上演時間約1時間)

北九州松本清張研究会

研究発表会

北九州松本清張研究会は、赤塚正幸北九州市立大学教授を代表に、北九州地域の研究者や学生が集う研究会です。昨年から地元ならではの研究として、共同で「半生の記」(初出「回想的自叙伝」)の注釈作業を始めています。7月12日の発表会はその第5回で、福岡教育大学助教授の久保田裕子氏が「彷徨」の章を担当、発表されました。



久保田裕子氏(左)

これまでの発表は下のとおりです。

- 第1回** 「松本清張『半生の記』注釈のために」
H14.9.14 花田 俊典(九州大学教授)
- 第2回** 「臭う町」
H14.11.30 赤塚 正幸(北九州市立大学教授)
- 第3回** 「途上」
H15.2.1 石川 巧(九州大学助教授)
- 第4回** 「見習い時代」
H15.4.19 松本 常彦(北九州市立大学助教授)



発表風景

●編集後記●

ようやく梅雨が明け、太陽が照りつける季節となりました。記念館も熱く燃えあがる時期です。

これまで以上に充実した館報をお届けしたいと考えています。よろしくお願ひします。(中野 吉明)



イラスト:山藤 章二

編集・発行
松本清張記念館

〒803-0813
北九州市小倉北区城内2番3号
TEL 093(582)2761
FAX 093(562)2303
<http://www.kid.ne.jp/seicho>
制作 (株)エディックス

- 開館時間 午前9:30～午後6:00(入館は午後5:30まで)
- 休館日 年末(12月29日～12月31日)
- 観覧料 一般/500円(400円) 中・高生/300円(240円)
小学生/200円(160円) ()は30人以上の団体
- アクセス JR:小倉駅から徒歩15分 西小倉駅から徒歩5分
車:北九州市高速、大手町ランプより5分

松本清張研究会 第8回 研究発表会

6月28日、松本清張研究会の「第8回研究発表会」が立教大学で開催されました。会員をはじめ、多数の友の会会員や一般の方など、約70名の参加者があり盛況でした。



郷原宏氏

まず文芸評論家の郷原宏氏が、「日本推理小説史上における松本清張」と題し講演されました。自ら読者として、編集者、ミステリー評論家としての視点から、探偵小説を誰もが読める文学に高め、80年にわたる日本推理小説史に黄金期を築いた清張の功績と、本格派を含めた続く作家たちへの影響などを論じられました。

次いで、東京学芸大学助教授の大井田義彰氏が「愛しみの構図——松本清張の〈女〉を読む」と題して研究発表を行い、活発な質疑応答が交わされました。



発表する大井田義彰氏と会場風景

第6回

松本清張研究奨励事業募集

募集要項

- 対象 ①松本清張の作品や人物を研究する活動
②松本清張の精神を継承する創造的かつ斬新な活動(調査、研究等)
- ※上記①②の活動で、これから行おうとするもの。ジャンル、年齢・性別・国籍は問いません。ただし、未発表に限ります。個人または団体も可。
- 内容 入選者(団体)に200万円を上限とする研究奨励金を支給します。
- 応募方法 今後取り組みたい調査・研究テーマ等の内容がわかる企画書、予算書、参考資料(様式は自由、ただし日本語)を、平成16年3月31日までに応募してください。

※詳しくは記念館までお問い合わせください。

